

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

自分を見つめて

里見 吉英

県内の施設で性的虐待事件がありました。性的問題に限らず身体的・心理的なものから自己決定という無視したり、拒否的な態度をとるネグレクトと言われるもの、財産権の侵害などあらゆる場面で利用者の権利を侵す危険性や、人間としての自尊心を傷つける可能性が誰にでもあるのだということを肝に銘じておかなければなりません。

現在、国では差別禁止法や虐待防止法が検討されていますが、私たち福祉従事者は、支援者でありながら同時に虐待行為者になりやすいという立場にあることも忘れないで欲しいと思います。では何故知的障害者の施設で、こうしたことが起きやすいかというのを皆さんと考えてみたいと思います。

よく施設が密室の構造であるとか、社会から隔離された場所にあるとか言われますが、グループホームやケアホーム、家庭でさえ似たようなことが起きています。町中にあっても近所の人との交流もなく、お客さんも来ない状況であれば、出入りは世話人と職員だけになり、障害者と職員という環境になりやすい実態がある

のです。オープンな環境をつくり、保護者やボランティアだけでなく地域の目にふれることが重要なことなのですが、夜間などはどうしても職員だけになることが施設と同様にあります。こうした空間的・時間的な密室化の状況をどう克服するか、これは職員一人ひとりに委ねざるを得ません。

今でこそ少なくなっていると思いますが、昔は指導、しつけの一環と言いい、相手の主張する力が弱いことをいいことに、手を抜いたり、体罰を繰り返すなど、人権意識が欠如していたようなこともありました。また、行動療法と言う考えから悪い事をしたら体罰、良いことをしたら美味しいう物をあげるといいう、いわゆるアメとムチの様な事も行われていました。私が大学で学んでいた頃は、この行動療法が使われていました。現在ではこの行動療法が強度行動障害を作り出したとも言われています。

逆に専門的な知識も処遇技術も無いことから行動障害が起ることもあります。自閉症の男性で、必ず決まった行動パターンをする方がいました。成人してこの行動パターンで固定している状況

況ですから、受け入れていくしかないのですが、その行動が許せない、本人のわがままだと捉えて、こだわりの強制的になくそうとしたのです。本人の状態は更に悪くなったことは言うまでもありません。こうしたことはほんの一例ですが、未だに信念を持って行っているところもあるのです。

個人的な性格やストレスも虐待に繋がる一因です。この仕事は、向き不向きがあるものです。イライラして相手に手を出してしまおうという人は、もともと仕事に向かなかったというのだと思います。また、日常のストレスの問題もあります。昔働いていた職場のある先輩は日ごとに様相が変わります。今日は落ち着いているのか、イライラしているのか我々は毎日チェックしていました。後で判ったのですが、原因が夫婦喧嘩だったのです。利用者も我々新人も自分のコントロールさえできない人に指導されたのではたまったものではありません。



知的障害者は「物言えぬ利用者」です。ですから、我々が感じなければなりません。更に知的障害の方々は、すぐに反応がでるとは限りません。長期間にわたって様々な圧力が加かり続け、変化が出てくるまでに時間がかかることがあります。その兆候やサインを見逃さないようにする事が大切です。虐待のようなことは、職員が起すばかりではありません。集団生活

活の中では利用者同士でもありませんし、稀には帰宅時の家族によるものもありました。こうしたことを察知したらすぐに報告すべきです。児童虐待の例をみて誰かが感じていながら残念な結果としてニュースになっていることはご承知のとおりです。

「物言えぬ利用者」のことを話しましたが一方で「物言わぬ家族」という立場も考えてみる必要があります。もう十年以上前の話ですが、福島にある東京都の施設で、虐待事件がありました。有名な白河育成園です。夜間寝ない利用者に対して睡眠導入剤を夕方六時から飲ませて寝かせ、毎日施設長が泊り込んでいました。教員の職員でその施設を運営し、虐待も日常的に行なわれていたことが判明し、最終的には法人の解散命令が出ました。ところが、告発した保護者のグループとは別に、その保護者達を非難した保護者も多かったのです。そんなことがあっても、やっと入所した施設から本人が自宅へ戻ってこれても困ってしまふ、あなたたちが告発したばかりに施設が閉鎖になってしまったではないかと。こうした気持ちがあることも解らないではないですが、ある意味では問題に蓋をしてしまうことにもなりかねません。

施設の中で職員の虐待を見逃すという行為があれば大変な問題です。今回の事件について周りの職員が分からなかったのか、それが気になります。また、自分では傷つけていることに気づかないことも多くあります。利用者には一番近い人間として言うべき時は、はっきり言うべきです。それによって初めて気づく事もあるのです。



虐待が起こる背景には別の要因もあります。モラルの欠如です。それがどうして起きるのかと言うと、モラル（土気）の低下。士気の低下がどうして起こるかという、モチベーションが低いから。知的障害者はその特性として変化が少ないので、利用者や向き合っている、自分は何をやっているのかかと思いつき、果たしてこの仕事に向いているのか、この仕事で一生食べていけるのかと不安になったりします。もちろんお金は大変ですが、どんな仕事でも同じだと思いますが、ただ生活の為だけと感じ始めたら長くは続きません。特に福祉の仕事はそうです。モチベーションが低い職員の集まっている施設はモラルが低下し、その先にはモラルの欠如が待っているのです。

「ふる里学舎」の職員は統率がとれている分、個性が発揮できないのでは」と他の施設長に言われます。バラバラな事があっても個性が尊重されているかとも思っているのではありません。独りよがりでは良い仕事はできません。どんな場面においても個性を発揮することはできます。利用者に対しての考え方をぶつけ、その結果としてチームのバランスをとっていくことなのです。

一定のサービスの質を保つための統制がとれているかどうか、それが利用者にとっては大事なことです。

あれこれ言っても、人間は不完全な生き物ですから、時にはミスも犯します。その時に隠したり、言い逃れしようとするとか、そういう体質があつてはいけません。今求められているのは、職員も施設もオープンにすることです。

自分の性格傾向や、得手不得手を自覚してください。そしてあまり無理をしないように。人間関係は、相性など当事者でなければわからないこともあります。抱え込まずにみんなと考える、利用者も職員も楽しく過ごしたいと思います。

(理事長)

去る六月五日法人全体で行った権利擁護研修会の講演を要約したものです。



辿り着いた場所

田尻 親子

初めて「ふる里学舎」を見学を訪れたのは下の息子がまだ通園施設に通っている頃で、その園での施設見学でした。もう十数年以上も前です。とても立派な施設でびっくりして目を見張りながら見学させていただきました。その頃は、まさか我が子達が二人とも、こちらにお世話になるうとは夢にも思っておりませんでした。

その後、再度訪れたのは通園施設に通っていた子供が養護学校に通い出して小学部の中学年になった頃でした。先輩のお母さんにアドバイスを受け見学の予約をし、仲間のお母さん達数人で見せていただきましたお話を伺って来ました。以前見学させていたいた時と違って建物が増設されていたり、施設が増えていて驚いた記憶があります。きつとこんなちゃんとした施設では重度のうの子は無理だろうな」と思っていたところ、一度やつてみましょう」と言ってくたさる、日中何時間かお願いすることになりました。預けて最初の頃は「何か迷惑をかけていないだろうか、壊したりしていないだろうか」とにやにやしながら家で待つていたりもしました。そうやって少しずつふる里学舎と繋がりを持たせていただくことになりました。

部最終学年からお世話になりました。また我が家の上の息子も障害があり、和田浦開所の時は中学校の特学に通っておりまして。この頃から支援費制度が始まり、こちらの自治体では前年施設利用実績のない者には受給者証が出ないことまで言われていたで、慌てて職場訓練に和田浦での利用をお願いしたところ快く受けてくださったことは今でもありがたく思っております。この頃から上の息子は、将来自立したいとの気持ちで強く、働いて自分でご飯を食べていきたいと常々口にしていました。障害のある子を一般就労させるのは並大抵ではないとわかつてはありましたが、かといってその方法や手だて、また相談先もまるでわからないことだらけでした。そんなときにふる里学舎でお世話になっている職員の方に相談したところ、今もお世話になっているケイスワーカーの方を紹介してくださいました。上の子も高等部は養護学校に進み、実習や面接、いろいろな場面である里学舎に相談し、お話を聞いていただき多方面からアドバイスをいただきました。高等部在学中も企業実習を重ねましたが、なかなか就職が決まらず、思い余つてふる里学舎に相談したところ、「うちから就職しましょう」との力強い言葉をかけてもらい、本人も「僕はふる里から就職します」との二つ返事でした。卒業後一年余りふる里学舎でお世話になり、おかげさまで卒業時に言ってくたさった言葉通りに上の子は無事就職し毎日仕事に通っております。



そして下の子も小学部、中等部、高等部と定期的にショートステイをゆつくりと本人のペースで利用させていただき、泊まりの生活にも慣れていき、学校卒業後の今も平日の間は泊まりで和田浦を利用させていただいております。入所の方と変わらず、いろいろな行事にも参加させていただき、それが本人にはとても楽しみのようで親としてはそういつた余暇の楽しみを用意してくださるのがあります。がたいことだと思えます。

我が家の子供達の障害告知の頃からみると法律も制度も措置から支援費、自立支援法とめまぐるしく変わった十数年でした。そんな中で家族会、研修会、職員の方々からのアドバイスやお話で右往左往しつつ、おぼろげながらもなんとか法律の枠組みが解るようになったのはふる里学舎との関わりがあったからこそだと思います。

「子供」から「成人」に新たなスタートラインに立った我が子達ですが、これからもふる里学舎との関わりを通じて本人達なりの成長を見守り続けていきたいと思えます。

(田尻克光・智恵母)



働くことは頼りにされる事

霜崎 孝行

もうクタクタで腕が上らない。なに利用者さんは、疲れた表情も見せず、ひよいひよいと身体を動かしている。大丈夫？もうすぐ休憩だから頑張らないと！励ましの言葉を利用者Nさんがかけてくれる。こうなると、もう、どちらが支援されているのかわかりません。

これは、昨年十月からはじまった姉崎蔬菜組合での大根の出荷作業での「コマ」である。ベルトコンベアで流れて来る大根の詰め込まれた十キロ程のダンボール箱をサイズ毎に分けてパレットに積み上げていく作業。この繰り返しの延々と一日中行います。利用者さんは、だいたいの同じメンバーで毎日行っています。で、仕事の流れが理解できているのですが、職員は順番に付き添っているのになかなか慣れない。正直きつくてしんどい。しかし「あの職員の動きは悪かった」「等、従業員さんから評価されるといふ時もある、気が抜けない。

方への支援は、汗水垂らして一生懸命に作業に取り組む職員の姿を利用者さんに直接見せて教えるんだ」と先輩職員から叩き込まれているので、これはもう、やるしかありません。付き添いだからといって見ているだけというのとは許されません。これが実は大変で、働く事の厳しさ身を以て教えられるのは、実は職員だつたりします。

しかしながら、社会と言うのはうまく出来ているもので、自分が見本を見せられなくても、一緒に働く従業員さんがしっかりと手本をみせてくれます。パートの主婦の方や六十歳をとうに超えたと思われる親父さんの動きは、無駄がなく時間が経過しても疲れを感じさせません。こういった動きを利用者さんは、毎日見てどうすれば疲れないように仕事ができるのかを学んでいるのです。

大根の時期が終わって、先日、慰安旅行と称して、姉崎蔬菜組合から「さくらんぼツアー」のお誘いをいただきました。途中、温泉につかり、屋食は大宴会でカラオケも楽しめました。

帰り際に「今度秋からは秋から頼みます」と組合の人から声をかけられました。利用者さんは目を輝かせて首を縦に振っています。職員が付き添っているとは言え、施設ではない一般社会の中で頼りにされている彼らがそこにはいます。障害者の就労には国も力を入れているだけであつて、こういったシステムがこれから充実していく事を望みます。

園に帰ってくるやいなや、一人の利用者さんから「今日は、ありがとうございました。これ、いつも世話になっているから。今日、あんまり食べなかつたでしよう」と一パックのさくらんぼをお土産にくれました。途中、誰に買っているんだろうと思っていたのは自分でした。お金がないんだからいいのにと照れ笑いのが一杯でしたが、何だかんだ言っても利用者さんか頼りにされていたのかなと、拡大解釈をして目頭が熱くなりました。誰かに頼りにされる事のうれしさって、こういう事なのかも。

(支援員)

編集後記

先日、和田浦では自然薯の定植が終わりました。「成功するように」と種芋一つ一つに思いを込めて植えました。

畑仕事は、その時期にしなければいけない事が沢山あります。そんな中でも夏野菜の収穫等、嬉しい事もあります。

茄子やトマトが、色づき始めた和田浦から佐啓第七十三号を送ります。

山本 亮人

